

文化財と技術

第2号

2002年5月

文化財と技術の研究会

目 次

≡研究論考≡

福島県内出土古墳時代金工遺物の研究

－ 筑内古墳群出土馬具・武器・装身具等、真野古墳群 A 地区 20 号墳出土金銅製双魚佩の研究復元製作－

(復元研究プロジェクトチーム) …………… 1

第一部 復元研究の目指すもの

- 〔1〕復元の企画(森 幸彦) …………… 1
- 〔2〕古代遺物復元研究の未来とその手法(鈴木 勉) …………… 9
- 〔3〕復元研究対象遺物の選定と研究課題(鈴木 勉) …………… 14
- 〔4〕ものづくりの立場から見た復元研究の体制について(押元信幸) …………… 22
- 〔5〕筑内古墳群出土遺物の自然科学的調査
(菅井裕子・渡辺智恵美・平尾良光・榎本淳子・早川泰弘) …………… 27

第 2 部 復元研究の経過

- 馬具の復元 …………… 36
- 〔6〕筑内 37 号横穴墓出土馬具から復元される馬装について(桃崎祐輔) …………… 36
- 〔7〕古墳時代金属装木製鞍の復元(古谷 毅) …………… 75
- 〔8〕筑内 37 号横穴墓出土雲珠・辻金具の鍛造技術について(山田 琢) …………… 84
- 〔9〕筑内 37 号横穴墓出土杏葉と鏡板について(鋳の製作と組立)(山田 琢) …………… 103
- 〔10〕筑内 37 号横穴墓出土鉄製轡の復元製作(山田 琢) …………… 109
- 〔11〕筑内 37 号横穴墓出土飾帯金具の復元について(伊藤哲恵) …………… 129
- 〔12〕筑内 37 号横穴墓出土杏葉・鏡板の吊金具の復元製作(伊藤哲恵) …………… 135
- 〔13〕筑内 37 号横穴墓出土縮金具の帯金具と帯先金具の復元製作(伊藤哲恵) …………… 137
- 〔14〕筑内 37 号横穴墓出土馬具の鉄地金銅張りの復元工程(依田香桃美) …………… 139
- 【筑内 37 号横穴墓出土馬具金具類・製作工程企画表】(依田香桃美) …………… 167
- 〔15〕筑内 37 号横穴墓出土鞍・縮金具の復元について(高橋正樹) …………… 176
- 〔16〕筑内 37 号横穴墓 木製鞍・鐙の想定復元製作(小西一郎・鈴木 勉) …………… 183
- 〔17〕出土しない敷物、紐、革製品を復元する(押元信幸) …………… 200
- 〔18〕筑内 37 号横穴墓出土馬具／復元馬具の調整・組立について(押元信幸) …………… 205
- 〔19〕筑内 37 号横穴墓出土馬具の調整・組立について(山田 琢) …………… 209
- 大刀の復元 …………… 216
- 〔20〕筑内 6 号・26 号横穴墓出土大刀の構造と復元案(菊地芳朗) …………… 216
- 〔21〕筑内 6 号横穴墓出土大刀の鉄地銀被せの技術について(押元信幸) …………… 223
- 〔22〕筑内 26 号横穴墓出土大刀の復元経過について(押元信幸) …………… 227
- 〔23〕筑内 6 号横穴墓出土大刀鞘と柄の製作(小西一郎) …………… 233
- 〔24〕筑内 6 号横穴墓出土大刀の柄の紐巻きについて(五味 聖) …………… 235

刀子の復元	236
〔25〕 筑内21号横穴墓出土刀子と装具の復元について (清喜裕二)	236
〔26〕 筑内21号横穴墓出土刀子の鞘・柄の製作工程 (五味 聖)	241
矢の復元	243
〔27〕 筑内 6 号横穴墓出土矢の復元について (清喜裕二)	243
〔28〕 筑内 6 号横穴墓出土鉄鏃と矢の製作技術 (山田 琢)	246
耳環の復元	257
〔29〕 筑内古墳群出土銅芯銀箔張り鍍金耳環復元製作実験 (高橋正樹)	257
銅鏡の復元	262
〔30〕 筑内37号横穴墓出土銅鏡の復元について (押元信幸)	262
〔31〕 筑内37号横穴墓出土銅鏡の鑄造復元工程 (長谷川克義)	264
金銅製双魚佩の復元	266
〔32〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩 (甲) の復元製作 (松林正徳)	266
〔33〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩 (乙) の復元製作 (黒川 浩 鈴木 勉)	279
〔34〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩のワッシャーと目玉を復元する (依田香桃美)	282
〔35〕 真野古墳群 A 地区20号墳出土金銅製双魚佩の鉾と組立について (山田 琢)	292
第 3 部 復元研究から何が見えるか	
〔36〕 鉄地金銅張り技術の復元作業から見えること (依田香桃美)	297
〔37〕 古代の分業と復元研究過程の分業について (押元信幸)	310
〔38〕 復元研究プロジェクトチームの運営について (鈴木 勉)	312
〔39〕 復元研究を終えて (押元信幸)	318
〔40〕 まほろんの復元展示 (鈴木 勉)	321
〔41〕 あとがき (森 幸彦)	324

≡文化財報告≡

一里段 A 遺跡の工事中立会に係る記録報告 (今野 徹・伊藤典子)	329
法正尻遺跡65号住居跡の縄文土器 (松本 茂)	341
文化財データベースについて	
- その 1 基本構造と遺跡データベースについて - (藤谷 誠)	345

≡研究論考≡

福島県内出土古墳時代金工遺物の研究

一 茨内古墳群出土馬具・武具・装身具等、

真野古墳群 A 地区 20 号墳出土金銅製双魚佩の研究復元製作一

復元研究プロジェクトチーム

工芸文化研究所	鈴木 勉
松林彫刻所	松林 正徳
黒川彫刻	黒川 浩
工芸作家	小西 一郎
Lemi's Metalwork Studio	依田香桃美
東京芸術大学美術学部	長谷川克義
東京芸術大学美術学部	押元 信幸
東京芸術大学美術学部	山田 琢
ambi ARTJEWELLERY&CRAFTS	高橋 正樹
鍛金作家	伊藤 哲恵
文化財と技術の研究会	五味 聖
東京国立博物館	古谷 毅
筑波大学歴史・人類学系	桃崎 祐輔
宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室	清喜 裕二
福島県立博物館	菊地 芳朗
福島県文化財センター白河館	森 幸彦
(財)元興寺文化財研究所 保存科学センター	菅井 裕子 渡辺智恵美
東京国立文化財研究所 保存科学部	平尾 良光 榎本 淳子 早川 泰弘

〔40〕 まほろんの復元展示

鈴木 勉

1 まほろんのオープン

2001年7月15日まほろん（福島県文化財センター白河館）が開館した。体験型フィールドミュージアムと銘打っているこの展示施設は、展示の案内に次のように大きく見出しが作られていた。

「実物と復元品を一緒に展示しています。復元品には触れることもできます。」

福島県と私たち研究会の共同研究の成果品が、常設展示のあちこちに並べられている。これまでの博物館展示であれば、ガラスの向こう側や、太いロープで仕切られた空間に「展示品にはお手を触れないでください」と書かれたプラカードと共に鎮座していたであろう金色に輝いた金銅製品や木製品に子供も大人も手にとってみたり、馬にまたがったりしている。その表情は年齢を問わず好奇心にあふれていて、これまでの博物館とは大分雰囲気が違う。人々はものに触れ、重さや質感を味わいながら、古代人に語りかけたり、古代人からのメッセージを受け取ろうとしているように感じられる。その表情がまほろん全体の雰囲気を作り上げている。

私は、これまで復元研究の行為を「復元を通して古代の工人と対話する」のだと機会あるごとに話をしてきた。それを技術者の特権だとばかりに自慢していたかもしれない。ところが、まほろんで復元品に触れ、鞍に跨った子供たちやそれを支えるお父さんやおばあちゃんの顔を見ているうちに、私はうぬぼれの鼻をへし折られたのである。他の人とコミュニケーションが成立した時の誰もが見せる喜びの表情と同じ顔を彼らははしていた。そのとき彼らは確かに古代人とお話ができたのだ。

2 記憶すること、感動すること

私たちの「頭」の中にある記憶は、何がきっかけになってよみがえるのだろうか？名称であろうか？映像であろうか？形であろうか？と私は常々考えている。記憶は「頭」の中にあると考えられることが多い。「頭」の中にあるとすれば、それは、文字であり、言葉であり、映像であるのだろう。でも、ほんとにそうなのだろうか？

人は他の人に何かを伝えたり、教えたりするとき、もっとも効果的な方法を考える。効果的にとは、より判りやすくということが多いのだが、それだけではない。同じように大事なことに、深くしっかり記憶してもらうことがある。

私はもっとも効果的な記憶法として「感動」を挙げている。「感動」というのは必ずしも大きな喜びや驚きばかりをいうのではない。わずかでも「こころが動くこと」をいう。体の内側か

らわき出てくる喜び、悲しみ、懐かしみ、親しみ、驚きを「感動」とすれば、それはささやかなものであっても、一瞬のこのころの動きにすぎないものであっても、私たちの記憶から決して消えることはない。私も20年前に初めて手にした銅鐸の「軽さ」、鑄型の砂の冷たさ、初めて日本刀を削ったときの鋼の柔らかさ、初めて飲んだ山の水の冷たさとおいしさ、などなど、きっと死ぬまでその記憶が失われる事はないだろうし、その確かさもほとんど変わらない。それに比べて文字や映像の記憶のあいまいさはどうだろう？それとは全く比較にならない。昨日あった人の顔が思い出せない、10年もお付き合いのある人の名前が思い出せないなど、そうしたことは日常茶飯事のことだ。

銅鐸の「軽さ」や、日本刀の鋼の柔らかさは私の手に残っているのだ。両手を胸の前に置けば、その「軽さ」や「柔らかさ」は昨日のように蘇ってくる。でも、この感触を他の人に正確に伝えることは決してできないだろう。人にとって触れることの大切さを強く感じる。

3 復元研究の仲間たち

まほろんの展示場に並ぶ復元品の数々を見て、福島県が私たちに研究の機会を与えて下さったこと、復元展示の目指す方向を丁寧に教えて下さったこと、調査の機会をふんだんに与えて下さったこと、研究調査のための議論に制限なくお付き合い下さったことがいどきに蘇ってきた。期日や仕上がりに対する緊張感の中で、時に忘れてしまいそうになる事ばかりである。改めて感謝したい。そして、復元研究を一緒に担ってくれた研究会の熱心なメンバーに巡り会えたことにも心から感謝をしたい。

この膨大な課題を持った復元研究の機会は、生涯にそう何回もあることではない。報告書作成までの丸3年という歳月は、これだけの研究課題に対してはあまりにも短すぎる。しかしながら一方で、福島県の研究者の方々や研

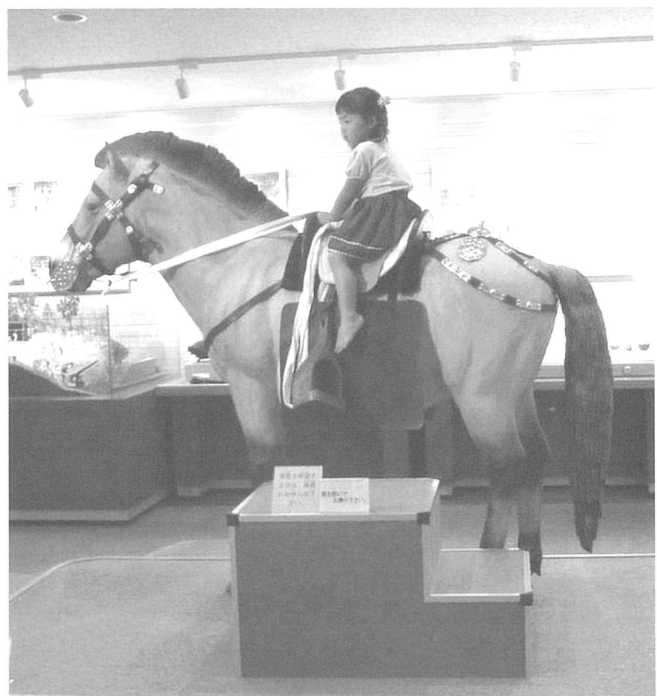


図1 まほろん展示場にて



図2 馬に装具を仮組みする伊藤さんと山田さん
(工芸文化研究所にて)

研究会の仲間たちの3年間という貴重な長い時間をいただけてしまった。その時間は、私たちの研究生活を意味づける点で計り知れないほどの重さを持つ。この3年間の研究機会と仲間たちとの共同作業を何よりも大切にしたいと私は考えている。

この報告書も、限られた時間の中で企画し、執筆者の方々には相当な無理をお願いした。そのほとんどの原稿が、当初の目論見の半分もまとめきれないままに締め切りを迎えたに違いない。そういった点で必ずしも十分な研究報告書とはなり得ていないかもしれないが、今後も続く福島県との共同研究で、その不備を補っていききたい。

4 さいごに

古代技術の復元研究を通して、古代の工人と対話をする。その復元成果品を通じて現代の人々が古代の人々との会話を楽しむ。そうして古代社会の人々の暮らしぶりが姿を見せるだろう。

まほろんが目指した大きな目標に、私たちの復元研究が多少でも貢献できたらこんなにうれしいことはない。

福島県の研究者の方々と古代技術の復元研究を始めて、早4年目に入ろうとしている。お互いに無理を承知でお願いしてきたことがたくさんある。そのやりとりの中で、意見をぶつけ合ってきた。私たちはささやかな心の動きである「感動」を最も大切にする同じ穴の貉であったのだ、と今私は確信している。

文化財と技術 第2号

2002年5月25日印刷

2002年5月31日発行

編集 森 幸彦・鈴木 勉

発行 文化財と技術の研究会

代表 鈴木 勉

発行所 特定非営利活動法人 工芸文化研究所

理事長 鈴木 勉

東京都品川区上大崎 1-9-4 (〒141-0021)

印刷所 株式会社山川印刷所

福島市庄野字清水尻 1-10 (〒960-2153)